



橋が落ちたので仮橋を  
バスが渡ります。

南オモの諸民族（南オモ  
研究センターに展示）。

調査の前にインジェラで  
腹ごしらえ。  
ハマル族の青年と。



私の  
フィールド  
ワーク

## エチオピア少数言語の 多様な言語実態を探る

高橋洋成 たかはしよな / AA研特任研究員

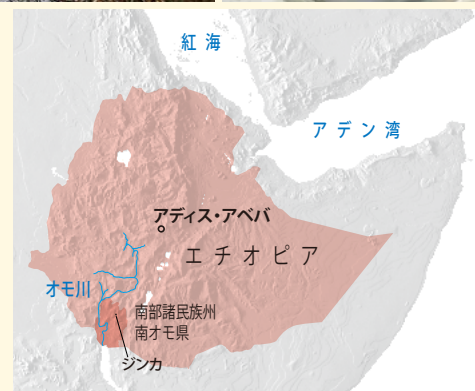
民族と言語のつぼ、エチオピア。

その南部に分布する多くの言語は、まとまった調査研究がなく、  
言語実態も不明です。現代社会における少数言語は  
今後どうなっていくのか、エチオピアは一種の  
モデルケースです。

### 多言語国家エチオピア

エチオピアには80以上の民族が暮らしており、それぞれが母語を持っています。母語となる言語は主に、アフロ・アジア諸語に属するものと、ナイル・サハラ諸語に属するもの、その他のアフリカ諸語（分類不明のものを含む）に分けられますが、これらのグループの中身はもっと細分化されますので、同じグループの言語を話す人同士でも言葉が通じるとは限りません。そこで、エチオピアの憲法（第5条）は、歴史的に主導的な立場にいたアムハラ族のアムハラ語を国家公用語として定めるとともに、それぞれの州ごとに別の公用語を定めて良いとしています。

さて、私のフィールドはエチオピアの南部諸民族州、その中でもケニアと国境を接する南オモ県です。南オモ県には12以上の民族が住んでいます。私はこれまでハマル族のハマル語を中心に、バンナ語、カラ語の調査を行ってきました。

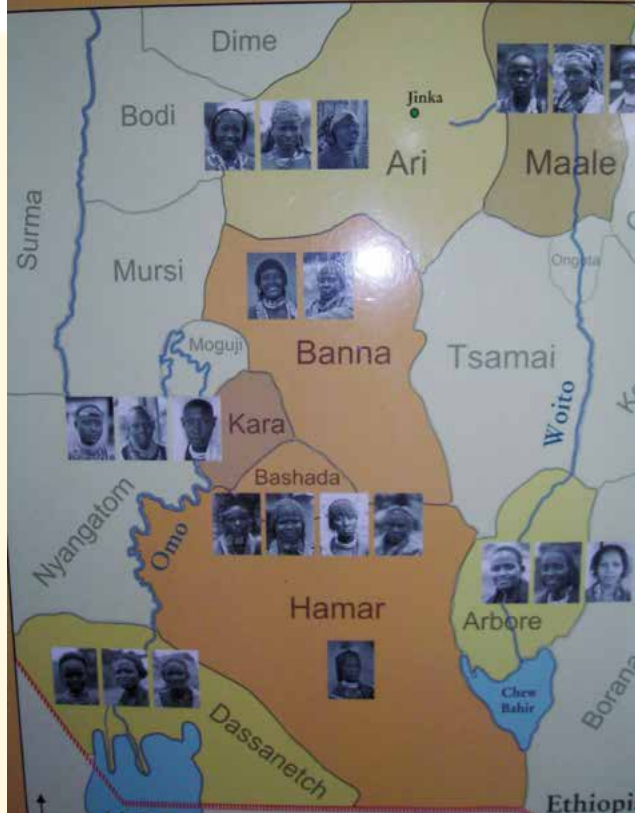


### フィールドまでの道のり

南オモ県の「オモ」とは、この地を流れるオモ川からとった名です。この一帯はオモ川を挟んで低地が広がっており、オモ国立公園やマゴ国立公園といった野生動物の保護区が置かれています。それだけではなく、この川の流域からは約250万年前的のアウストラロ・ピテクスの骨から、約20万年前的のホモ・サピエンスの骨まで、人類の進化の証拠が次々に発見されています。この地には、気の遠くなるような昔から人類が暮らしていました。

では、私が調査している南オモの諸言語はどれほど古いものかという興味がわきますが、それは分かりません。私が調査を始めた2006年当時、ハマル語のまとまった辞書や文法書など無く、数百語の語彙集と報告書、論文がいくつかあるだけでした。この一帯の言語の多くは、十分な調査がなされていないか、手つかずのままなのです。

その大きな原因は、道のりの遠さにあるでしょう。首都アディス・アベバから、南オモの県都ジンカまでおよそ700km。早朝のバスでアディス・アベバを出発し、ジンカに到着するのは翌日の午後になります。そこからハマル族の



ハマル族のマーケットにて。



ハマル族の女の子。



ハマル族のマーケットに来たマアレ族の女性（中央）。

町ディマカやトゥルミへ行くには、さらに100km近くを移動しなければなりません。調査のための機材に加え、着替えや予備の食料、飲み水を詰め込んだ30kg近いリュックを背負っての移動です。

運転手付きの自動車を借りられれば良いのですが、近年は観光客が増え、料金が高騰しています。安全をとるかお金をとるか、今の懐具合なら何日滞在できそうかを、収支簿とにらめっこしながら予定を組み直す毎日。途中の橋が落ちたり、民族間の抗争で道が塞がれたりすることもあるので、予定には余裕を持たせなければなりません。無事に帰国するまでがフィールドワークです。

## 大騒ぎの語彙調査

私がハマル語の調査を開始したとき、まずAA研が発行している『アジア・アフリカ言語調査票』を頼りに、基礎的な語彙の聞き取り調査を行いました。

ある日、牛飼いの仕事を終えて丘の斜面に寝そべっている男の子に、動物の名前を聞いてみました。「牛」はワーキ、「やぎ」はクリ、「羊」はヤーティ、「ろば」はウクリ……では、「象」は？ 男の子の口がぴたっと止まりました。何気ない語であっても、改めて問われると出てこないものです。男の子は突然立ち上がり、村へ駆けて行き、大人たちに「象」の言い方を尋ねました。ところが、その場にいた大人たちも「象」の語を思い出せない様子。村中が大騒ぎになった末に、男の子が笑顔で「グルグル！」と答えてくれました。

しかし、後に分かったことですが、それは間違った答えでした。正しい「象」はドンガルであり、グルグルは「わに」を意味するものです。グルグルとドンガル、何となく響きが似ていて間違えやすいような語ではあります。日本でも昔、キリギリスと言えば今の「こおろぎ」の意味だったそうですが、

人の頭の中にある語というのは、しばしば中身が入れ替わってしまうようです。

## 「尾」に注意！

聞き取り調査の結果は何度もチェックする必要があります。しかし、相手にしつこく聞くことも厳禁です。相手が「分からない」「忘れてしまった」とは言えず、間違った答えをひねり出してしまうこともあるからです。

ある日、ハマル族ではありませんが、ハマル族の地域に長く住んでいた青年を相手に語彙調査を行いました。動物などの「尾」を意味する語として、彼は一瞬悩んだ後、サーマと教えてくれました。別の日、ハマル族の青年の協力を得て語彙のチェックをしていたところ、サーマと聞いた青年が吹き出し、大笑いしました。それは男性器を意味するものだったのです。「尾」を意味する正しい語はドゥブナでした。

あの青年は「尾」を意味する語を思い出せず、とっさに別の語を思い浮かべたのでしょうか。それとも、ただ私をからかっただけなのでしょう。結局のところ、フィールドワークの成否は「お互い正直になる」ということにかかっています。良い人間関係を築き上げることがフィールドワークの醍醐味であり、難しさでもあります。



バンナ族の男性。



ツァマイ族の兄妹。

## ピジン・ハマル語？

ある年の調査でのこと。前年の調査で得たハマル語の文法項目を確認しようと思い、上述したハマル族の青年に例文を1つ1つ確認したところ、青年は何度も首をひねっています。中には「それはハマル語ではない」と言われた例文さえありました。その例文は、長らく県都ジンカに住んでいたとは言え、やはりハマル族の出身の中年男性から教えてもらったものです。なぜこの青年には通じないのでしょうか。

後になって判明したことですが、ジンカの中年男性に教えてもらった例文には、ピジン・ハマル語が混ざっていました。ピジンとは言語学の用語で、異なる母語を持つ人々が必要に迫られて、どちらかの(あるいは両方の)母語を簡略化して作った共通語のことで

す。ハマル族の人々は、他の民族の人々と会話をするときはピジン・ハマル語を使用し、近年では警察など公的な仕事に就いた人々もこれを用いていたそうです。しかし、研究者の間でピジン・ハマル語の存在はほとんど知られておらず、およそ40年前に書かれた論文でわずかに言及されていただけでした。

おそらくジンカの中年男性は、外国人である私のために外国人向けの言葉を、すなわちピジン・ハマル語を教えてくださいました。しかし、ハマル族の青年に通じなかったという事実は、ピジン・ハマル語が忘れ去られつつあることを意味しています。南オモ県でも国家公用語であるアムハラ語の教育が進んでいる現在、地域限定の共通語であったピジン・ハマル語はその役割を終えたのかもしれませんが。

## 「ハマルの言葉」の実態を求めて

ハマル族は比較的広い地域に住んでいるため、ハマル語には方言差があると考えられますが、まだ十分なデータがありません。方言について人々に尋ねると、「いや、ハマル族なら同じ言葉を話している」と答えます。実際には、かすかな言葉の違いで出身地を把握しているようですが、それは無意識に行われているので、私が質問すると不思議そうな顔をします。

一方で、周辺に住むバンナ族やカラ族も「ハマル語を話せる」と言います。事実、ハマル語、バンナ語、カラ語は方言と呼べるほど近い関係にあり、互いにほぼ完璧な意思の疎通ができます。にもかかわらず、ハマル族はバンナ語、カラ語を「似ているが異なる言葉」と認識しており、バンナ族、カラ族の人々も自分たちの言葉とハマル語の違いを知っています。

言語と方言の間に明確な線を引くことはできません。しかし、彼らにとってはハマル族の話しているものが「ハマルの言葉(ハマル・アフオ)」であり、バンナ族の話しているものが「バンナの言葉(バンナ・アフオ)」なのです。そうした線引きによって、はじめて人々は言葉の違いを意識します。逆に、「ハマルの言葉」というラベルを付けられたものは、その裏に多様な言語実態が存在しているにもかかわらず、言葉の違いが話者の意識に上ることはありません。

言語学者として私が知りたいのは、「ハマルの言葉」の裏にある多様な言語実態です。実際、毎回の調査で得られる言語データは少しずつ違っていますが、それらのデータを重ね合わせれば、重なり濃い部分と、薄い部分とが見えてくるでしょう。「典型的なハマル語」と呼べるものがあるとするれば、最も重なり濃い部分を集めたものになるかもしれませんが。こうした濃淡のパターンは、1度の調査で得られるデータだけでは決して見えてきません。何度も調査を繰り返し、言語データを蓄積していくことで、ようやく見えてくるものなのです。

